

tab

No.
30

2
0
1
1 / 11 / 15

後藤美和子 / 木村和史 / 野村龍
福島敦子 / 石川和広 / 長尾高弘
水島英己 / 秋川久紫 / 岩田英哉
倉田良成

縮 = *Machilus thunbergii*

cont.

詩篇

- 後藤美和子：再会／01
野村龍：雲／03
岩田英哉：わたしの好きな風景／05
秋川久紫：疑似《反》経済詩篇・アンリ・ルソーの森／07
長尾高弘：炭酸分子／10
福島敦子：おつかれさま／12
石川和広：混じりあう／13
水島英己：私は何を手助けしたのだろうか？／17
倉田良成：sacrifice・馬あるいは女が神になること・眷属揃って空しくなること／20

文

- 木村和史：夜中／25
あとがき集／27

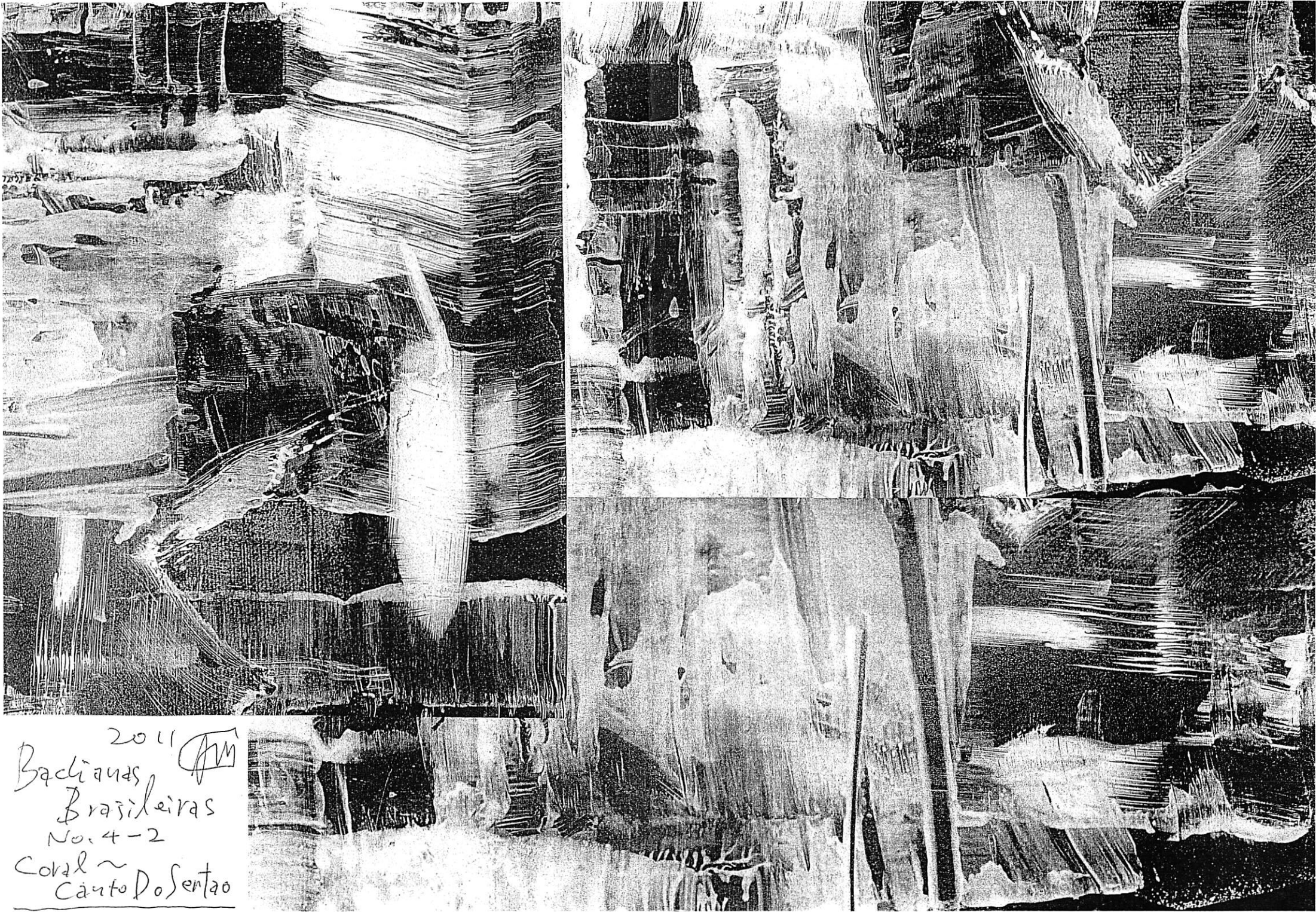
画：和田彰


tab 第30号／2011年11月15日（毎奇数月発行）

編集発行人／倉田良成

〒230-0078 横浜市鶴見区岸谷4-25-25 鶴見岸谷ハイツ201

Eメール／kateis11@k3.dion.ne.jp



2011 
Bacianas
Brasileiras
No. 4-2
Coral ~
Canto Do Sentao

後藤美和子

再会

走れ、とかつて波は言った

私は地図でしか

堤防を知らない

南と北

西と東を貫く

長い渡り廊下に

黄色い遮断機が下りた

私たちがつけていた胸の

星の形のバッチは

季節外れの花を咲かせた

生き急ぐかのように

あえぎ

過呼吸する

秋の空の下

みんな年をとっていた

数年まとめて線を刻み

雨が降り

誰も何も知らず

何も振り向かず

ただ八月を生き延びて

すれ違っていくのだ

遠吠えをする夜

外に置かれた台車に

積もっていく

突如震える長針に

笑いもし

涙声で語り

年が洗い流すのを待つのだ

(皆既蝕六〇)

野村龍

雲

朧げな灯台は

薬指のような影を靡かせながら

乳香 没薬 黄金を

しなやかなアスパラガスに捧げる

掠れた時間が

傾いだ蜉蝣の瀧からあふれ

研の微睡みのなかで

麦藁帽子は燃え尽きる

血の細波は キクロプスを幾度も訪れ

夕闇を伝って 守宮の舌が ひとしづく眠りに落ちる

《軽飛行機のコンパスは

王女の隠れ家を 精確に探り当てた》

ここから先の国々には 台うてながありません

足を踏み入れる方々 くれぐれもご注意を

線からはじめたものが いつの間にか赤い束になった

時間が働いたのだ ひとえに時間だ

食卓には 蝸牛の脳神経と ラディッシュのサラダ

加えて上質の微笑みを少々

羊皮紙一面にびっしりと書き込まれた水の魔法
余白に 書きかけの ちいさな王子様のお話

いいことがある時は いつも鐘が鳴った
ほら あそこの丘の上

岩田英哉

わたしの好きな風景

かもめが街中を飛ぶ

霧笛が鳴り

海があり、港があつて、船がいて

橋の上から

太平洋に沈む夕日が見える

釧路、わたしのふるさと、港町

わたしの好きな、運河に囲まれた

リ्यूベックの町並

バロック様式のファッサードの家並が

運河に沿って続いている

そこに舳る船々

この町は、夏に光り輝く

中川一政の描いた真鶴の風景

その半島の色とりどりの絵の具の家々

跳ねる魚（それから、酒）

サンフランシスコの町並と

港と太平洋の波

フィッシャーマンズウォーフ

魚の料理

（わたしは、東西両岸から太平洋を

眺めたのだ）

カリフォルニアのナパヴァレー
青空と、乾いた空気の感触
緑陰で飲む葡萄酒の味

ハイデルベルク
中世の町並と

それを眼下に眺める古城

ネッカー川がいつまでも流れている

十月は黄金色に染まる

シュヴェツツインゲンの宮殿の

庭の中の庭、「世界の果て」と名付けられた

庭の遥か向こう、草木でつくられた長いトンネルの
遥か向こうに

世界の果ての景色が見える、バロックの庭園

何度も訪れたき

わたしの憧れのやむことの無い

わたしの好きな風景

August 28, 2011

疑似《反》經濟詩篇

悪の精神には、会計期間は元より、決算も申告もない。例えば、その断面をスキャンすることが出来たとしても、通常、基本的に内容は公示されない。だから、稀に公告の機会があると、思惟と試行の結果として生成される魔の財務諸表にはしばしば仮装が施される。韜晦するなら、架空経費あるいは架空債務がいいだろう。粉飾するなら、契約書（黙契を含む）や領収書の偽造・変造といった手立てもあるかも知れない。ただし、恋の裏帳簿や二重帳簿を見かけたからといって、直ちに不実であるとか、秘匿された悦楽の企みが存すると考えるのは早計だ。時に、呪詛や祈りの除外手段とされる遠隔地預金として、実際には何らの意図もなく、長期に亘って放置されて続けて来た夢想の残滓に過ぎないことが多い。

革命前夜に飲むとすれば、水出し珈琲に限るだろう。アクリルガッシュで描かれたような原色の舞台を背にして、匏屑みたいな覚悟を持って怯懦の裡に臨戦を語る男たち。日の出とともに企業広告とのタイアップを排し、一切のバーター取引を拒絶して、リスク分散などまるで考慮しない極めて非効率的な超経済世界を築き上げよう。

魂のプライマリーバランスを好転させるためには、まず、狙撃者の内奥に刺さっている赤い釘を引き抜くところから始めなければならない。あるいは、誇り高き女たちが夜ごとに流す碧い涙より、金利計算に類する一切の不純物を取り除いてしまうところから。歳出の効用を考えるのであれば、礼節を尽くして阿部薫やスコット・ラファロに逢いに行くこと。歳入について論じたければ、ただ畏敬の念を携えて庄司甚右衛門を訪ねることだ。加えて、位相のパラレルの実現を条件として、同位角や錯角が等しくなるといった初源の定理を、決して狂気や破綻の証明手段に使ったりしないこと。処分に対する不服申立てを封じ、不作為への対峙を敢行していくことが出来れば、暗澹た

る我々の未来は明るくなるのだ。

アンリ・ルソーの森

自分の未来に

媚びるなど 告げた君が

不意に 立ち去ってしまったから

もう 何年になるのだろうか

僕は 君がその時

単に 懶惰な日常を

肯定したのだとばかり

思っていたのだけれど

今にして 想えば

君は 背をかがめて

誰も 顧みることのない

初源の 定点を

自分自身を 減算することによって

ただ 衛ろうとしていただけだったのだろうか

心の浪費を 叱る人が

途絶えた刻に 漸く始まる漂泊

失うことは

決して 容易くなく

維持していくことが

いつも 困難とは限らない

海原の上なら

意のまま 歩いていけるのに

踏み固められた 大地の路上を

真つ直ぐに歩いていくことが出来ない

君が 何より

居合わせた者の

強い感情のうねりと

厚顔な鈍器みたいに

連綿と 承継されていく

人の世の 在り様に怯え

本能的に それらの事象と

しばしば 隔たろうとしていたのを

察知していながら

僕は 畢竟

童化の 意味一つ

分かるうともしないで

膂力によって それらを

アンリ・ルソーの森の中に

統御し 聖化する試みすら

予め 放棄してしまっていたのだ

長尾高弘

炭酸分子

九月一五日

夢のなかで映画監督になっていた。なりたいたと思ったことのない職業なのに不審なことだったが、今日は作品の公開日なので、まわりの人々が成功を祈ると声をかけてくる。自分でも、是が非でも成功させたいと気持ちが盛り上がってくるが、作ったわけではないのでどんな映画かわからないまま夢が終わった。

九月一七日

激しい狐の嫁入りのあとは、本格的に降るぞという雰囲気。激しいというのは、思い切り晴れているのに、じゃぶじゃぶと降っていたので。ポツポツくらいにしとけよ。

九月一八日

最近の蚊は秋口に元気になるようだ。連日刺されていると慣れてきて、ときどきは腕に留まっている蚊に気付くようになり、さらには撃墜できることも。しかし、撃ち落しても腕に血がつくときはもう手遅れで、蚊にとっても私にとっても残念な結果になるだけだ。

九月一九日

正力松太郎はCIAにプロパガンダの進捗状況を報告していた。彼は日本国内に原子力研究が根付くことなど望まず、日本国内で原子力の平和利用の既成事実を作ること望んだという。いったい何がやりたかったんだ？

九月二一日

風の音のほかに、遠くでピーと笛を吹くような音。木造家屋の2階は地震のように揺れている。今こうして文字を打っているディスプレイも揺れてい

る。ドアががたがた鳴っている。さすがに気持ちが悪く落ち着かない。

九月二一日

嵐が去ったので犬を外に連れ出した。空は晴れて星が出ている。風はほとんどない。空気は生暖かいものに置き換わっている。秋の虫の声に混じってぶせいつぶつという音が聞こえる。近くの高圧線の鉄塔から聞こえてくる音だ。初めて聞くものではないが、今日はやけに耳に残った。

九月二二日

歌舞伎は好きで見に行っているのだが眠くなる。たとえば寺子屋の最後。主の遺児を守るために身代わりを殺した夫婦、それを予想して身代わりを差し出した夫婦が、死んだ子のために焼香をする。省略なしで四人が順に完全な焼香をする。大切な場面なのだろうと思うけど、三人目あたりで寝てしまった。

福島敦子

おつかれさま

わたしをわたしから解放してあげたい
そとにぽんと出ていく感じ
くちから

息とともに はき出して

吸ってー

はいてー

す 吸ってー

はあああく

空と海と砂が交わるころ 渚

足が濡れる

わたしから出た透明なわたしが歩いている

少しの間 帰らなくていいよ

そこにいて

手を振っている

微笑んでくれている

透明なわたしが

おつかれさま とそっとわたしに語りかけてくる

言葉は返さない

笑顔でわたしも手を振っている

石川和広

混じりあう

胸が痛いといいたいのです

食品の買物をしていてだけで困惑します

そこにどれくらい放射能があるだろうかと即座に思うから

昔から体力はないのです だけでも生きてはきたのです

なんとか

朝日のことを考えます

僕らの上に降る朝日は核融合の結果です

僕らに影を落とすのは核分裂生成物です

こないだツイッターである方と話していましたら

その方は魚沼におばあ様がいらっしゃるらしいのです

魚沼のコメは雪解け水で作るそうです

魚沼の一部も事故で汚染されているように見える文科省の地図を載せた
ニュースを

見ながら会話していたのです

僕は汚染という言葉は嫌いだけど

しようがありません 英語では Contamination 混ざり合うという意味もある

この事故が起きて初めて知ったのです

もとは「ある言葉とある言葉がまじりあって新しい言葉ができる」という

意味だそうです ブレックファストとランチが混じるとブランチです

それも Contamination です

魚沼に降る雪に放射性核種が混じりあう危険性もあります

米がどうなるか、その土地の人は大丈夫だろうか

その方は心配されていました

そういう話を実際会ったことがないけどネットで会う人と話します
来る日も来る日もです

僕は被ばくした大地のつらなりにいるのだと見えなまま感じます

つらなりは海にもつながります 海も汚されたからです

海の中の海底山が恐ろしい軋みを立ててプレートに引き込まれたから

3月の地震が起きたのではないかと聞きました

海の中にも山があるのだと思いました

*

手前までの部分を書いて作品は書けたと思ったところ、あるニュースを目にした

大事なので書くことにした（左記の括弧内は朝日新聞ネット版10月19日「からの引用」）

事故由来の放射能汚染を調べた文科省の汚染地図について

新潟県の泉田裕彦知事が10月19日の記者会見で

「天然の放射線を配慮していない。いい加減な数値である可能性がある」と
批判した

新潟県は汚染地図の濃度の濃い部分と放射線を出す花崗岩が多い地帯が重なりと主張

「11月中旬までに独自の補足調査をし、「事実と違えば（文科省に）申し入れを行う」という

僕は魚沼がどの程度汚染されているか今は正確な判断が付きにくいと思った
地球化学図²という図表を見る 確かに天然の鉱物資源の放射線量が新潟県
辺り濃く見える

私の近所では六甲山も花崗岩が多いと聞く 全国にそんな場所がたくさんある

ウランや土壌のカリウム成分が多い地帯、花崗岩地帯はどうも放射線量が多いことになる

しかし事故の放射性セシウムの降下は新潟も免れてはいない。だから心配は変わらない

場所によって濃淡はあるが日本列島の全都道府県に放射性物質が降った
むろん事故以前からの自然の放射能と事故由来の放射能を分ける必要がある
そして原子力発電所の事故によってどれだけの放射性物質が地面や海中に落ちたのか

それらをいかに植物や動物や私たち人間が吸収しつつあるのか
どのようにそれらが進行しているか油断ができない

情報の元である国や電力会社に反省がなく、信用ならないからである

この詩の前半で僕は悲しかった その悲しみは一瞬翻った

しかし総体として大地や海や体の汚染は進んでいるように思う それらに戸惑い、悲しむ

コーヒーを飲みながら世界について僕はあまりにも知らないことが多いのに
気づく

子供のころ友達からもらった鉱物のかけらが怖くなって捨てたことを思い出
す

被ばくした人がこれからどれだけ苦しむのだろう

想像するだけでいてもたってもいられない気持ちになる

僕は政府や自治体へ意見や提案のメールを出しながら井伏鱒二の『黒い雨』
を読んでいる

(『黒い雨』は実在の重松静馬氏の日記にその内容のかなりを負っていると
猪瀬直樹が指摘している)

原爆と原子炉はちがうけど 放射能汚染の未来に倒されてしまわないように
教えを乞う姿勢で読んでいる

朝日新聞 新潟知事が汚染マップ批判「天然放射線を配慮せず」

<http://www.asahi.com/special/10005/TKY201110190145.html>

²AIST <http://riodb02.ibase.aist.go.jp/geochemmap/setunei/radiation/setunei-radiation.htm>

。子供を守るささ [SAVE CHILD](#) 【地図】 2011年3月・4月・5月の合計の放

射性セシウム137の都道府県別月間降下量の汚染マップ（わかりやすい）

<http://savechild.net/archives/9956.html>

私は何を手助けしたのだろうか？

水と光りと微生物を中心に考えるべきでしょう、古楽器の調律を専門とする人が静かに話す。菌を殺してきたことを反省しなさい。すべては照らし合っているのです。

だれの声、なんという楽器、吹いているのか、弾いているのか、わからないが、とてもなつかしい。ハーモニカ。ピアノ伴奏だから、管の響きに聞こえたのだ。

そこからはじき出されている。発酵のところだよ……。そこまで待てないから腐食で終わるんだ。我慢と強情。秋は満ちてやって来る。教訓を聞き流して、芒が笑っている。

月の砂浜に寝そべって、遠くに輝く白い水平線を眺めていた少年の日からやり直すことができたなら何をやる？ そのまま、そこでガジュマルの木に棲むケムムンになって、果てしなく忘れられてゆき、年老いて帰郷した誰かの流す涙に身を変えるだろう。

繰り返しのところで息継ぎをする。その草の萎れたところに眼が引きつけられる。近代文学が好きになったという体操好きの少女を好きになった。たとえば「ナイチンゲールはパークリー広場で歌った」など。櫛の肌に触れた指先の消えた露。

静かな十月の朝の時をゆるめよ！ 坂道の金木犀から、反語の匂いが消えて何年になった？ 川沿いのコスモスが私の中で揺れなくなってから何年経った？ 静かな十月の朝の時をゆるめよ。そこに残っているかすかな夏の光り。

綴れよ刺せよ、肩させ裾させ、と蟋蟀は鳴くという。明日の仕事の準備をしながら、耳を外に凝らしてみる。確かに鳴いている虫がいる。ここ室内では、北村太郎のように言えば「刻々と生きている」わたくしが泣いているのである。

「生の生、死の死」から省かれるのは酔いや匂い、きみの柔らかかな肢体のくぼみ。しかし、ほどけるのもある。無闇な恐れ、そこにからみつく因襲や垢。爽やかで味い朝に身を横たえると、くつきりと浮かび出る埋葬のイメージ。

ニューイングランドの折れ曲がった、高低差のある山道を飛ばしながら、バージーは言う。ニューヨーク警察の無線が届くことがあるんだよ。ベントンでは独立戦争のモニュメントを背景に入れて写真を撮ってくれた。短パン姿の、腹の出た正直者のドライバー。

伊豆の大島で、ぼくらが投げ出された夜。一回転した車から這い出たきみとぼくが星空に映っていた。「生きている?」「生きている」。単純な応答がいつまでも心に残っている。

だけど、生還はロマンチックな嘘だったのかもしれない。死んでいる?

「暗鬱の仮面ではなく、滅亡の縁まで」という言葉が浮かんだ。問いの中に隠れることなく、顕示する問いを問え。ハナミズキの赤い実が透明な空を願うように。しかし、真に現れるためにはうまく隠れなければならない。わたしの遠い人よ、現れなさい。

片倉城址に登る。誰もいない本丸跡。空中に古ぼけた蜘蛛の網が二、三箇所架かっていて、捕らわれている虫が淋しそうだ。その網を茫然として眺めている間に、堅牢な格子の中に囚われていた。緑の制服の高校生が煙草を吸っている。上を見上げながら、隣の彼女に虫の名を尋ねている。下を見下ろして、「優しい虫だよ、ぼくらは」。

何が残るのか。「秋の美しさに耐えかね」「こんにやくばかり」のこる「明月」。いや、そうじゃない。私たちだけがいつまでも残る。こんにやくの滅亡、鳴る琴の滅亡、木槿や萩の滅び、その後でも私たちだけが残るのだ。

歌を歌う、その尖った声は塩の味がする。ひどく狭い地方の言語だが、文学があつたりする所ではなく、その周辺の渚の言語だ。あまりに辛いから、意味がずり落ちて、赤銅色から骨の色までの音域で、詩が朗読される。貴重な記憶のような声で。

「I will love you forever and a day.」という表現、「私は永遠と一日、あなたを愛します」。「一日」を付加するその精確さに詩が「起きる」とボルヘスは言う。気が遠くなるほどの永遠の最後の「一日」こそが永遠の真の姿なのだ。永遠に遮られた「一日」。あなたを愛します。

「フラスコー本分の露、一、二匹の蜜蜂」エミリーの詩が薔薇の花を目指して蜜蜂のように飛んでゆく、朝の露に濡れながら。泣くことができるくらい孤独だというメッセージは、低い羽音のダンスに変換され、やがてきみの食卓の壺に密閉される。

心と身を結わえている木について聞いたことがある。失望で塗りつぶされた心を身が受けとるときの八つの木。八つもあるから大丈夫。身は身の上になり、心はその内になりがちだが、そのとき「花は他人を憎まなければ蝕まれない」というのが花への木の祈りだ。

(“Deceptive Cadence”の一部)

註(八木重吉、エミリー・ディキンソン、芭蕉などからの引用がある。)

sacrifice

ヤムタラの国々には言い伝えがあつて、それは主に犠牲に関することである。あるいは言う。きよらかな処女の眠る屋根に一本の白羽が立つと、彼女は行かなくてはならない。総じて山の神の嫁として、あるいは同じことだがその贅ズクとして、彼女は特別に選ばれたのだ。ヤムタラの山に入るには嚴重な掟があつて、それを破ることは禁忌とされている。山に入るには、その年に満で三十に達した、選ばれた男だけが知らされる秘密の呪言があつて、その秘密を伝えることができるのは同一支族クランの三十一に達した男だけだった。一行は笛やタムタムでにぎやかに練り歩すが、言葉を発することはけつしてできない。完璧な沈黙のうちに、神の花嫁はそつと地上に置かれる。それからあとは振り返ってはならない。ほとんど一目散に山を下りる。やつてはならないことだが、あとで山の上に覗きに行ったものがいて、そのありさまを見て、屍体一体、骨一本も見いだせなかったという。ジャガーやコンドルのたぐいはその山にはいなかったのに、である。むしろ死骸のたぐいをそこに見ることは不吉とされた。神はその贅を悦ばなかったのだ。そこに屍体の痕跡がないということは、すなわち全き昇華、完全なる聖母の昇天に似た現れとは言えまいか。これのヴァリアントに近いが、ヤムタラには違う系統の話もある。ここにも女が出てくるが、これは必ずしも処女というわけではない。名前も幾通りか伝わっているが、幾つもの訛伝があるようだ。オサマ、オータマ、タマ、あるいはオノ、というたぐいである。この場合任意の通行人から「その一人」が選ばれる。たとえば山に入るときのような、入り組んだ手続きは省略されている。あるいは、忘れ去られている。そして彼女がどうされるのかというと、池の人柱になるのである。河の場合もあるけれど、多くは池にまつわるもので、場面は山から水場へ変わる。人柱が具体的にどんなものか、じつはよく分かっていない。水際に埋められたものか、それとも水中に埋けられたものか。後者であれば水中で解体してしまうわけだが、前者であればその痕跡だけは残余しているはずである。そして、われわれが実際

に目撃したわけではないけれど、多く言い伝えとして残っているのが、この残余の形だといえる。人柱はまれに、男女二体で出現することも多いという。ヤムタラの古老によれば、それは成人の女と少年であることが多いという。どうしてそこにもう一人加わるのか、ヤムタラの古い時代のことなので、意見の分かれるところだが、オサマ、オータマ、タマなどの系統の名称が、じつはオノという名に源流を発することに秘密があるらしい。オサマ、オータマ、タマなどの一連の名は、名族オノに発するのだ。女神とその一つ子が言い伝えの悲劇をとどめている。すなわち、オノなる天上界を追放された女神は、子とともに飢え疲れて水場まで来た。そこで祈って事切れたが、この祈りはこのことだけで完結するものではなかった。水縁で、山巔で、幾たびも暗い高貴さとして繰り返された。

馬あるいは女が神になること

ヤムタラから少し離れた辺境とも言うべき地には独特の風俗や風習があつて、ヤムタラの人間にとっては理解できないことが多くあつた。もとより山岳地帯がほとんどを占めるこの土地では、大きなあるいは小さな、獣のたぐいが飼ひ慣らされてきたが、その小さいものから言えば、誰もその実物を見たことはないが、ごくごく細い筒に入れて飼われてある狐の形をした影がしばしば目撃されるという。それは鳴きもせず、ただじつとうずくまっているだけだが、それが筒を抜け出し、気ままに振る舞うようになると周りに仇をもたらすことしばしばであるという。そのかわり、これに自由に掣肘を加え、人力でもって管掌しうるようになれば、その一族は富み栄えることを得るという。いろいろの不思議があるようだが、そこで何が実際におこなわれているか、一切は不明である。何かしらあるあやかしの業が存在していることだけは確実なようであるが。これと明らかに関連している事象として、もっと著しい伝承がある。それは端的に言つて、人と馬との結婚に関する言い伝えである。かなり荒唐な要素を含んでいるので、どこまでが本当のこととどこまでが訛伝であるのか確定しがたいが、説話は次のような次第を持っている。

昔あるところに貧しい農夫がいた。妻はなくて美しい娘がいた。また一匹の馬を養っていた。娘はこの馬を愛して夜になれば厩舎に行つて寝て、ついに馬と夫婦となる。ある夜父がこのことを知つて、その次の日娘に知らせず、馬を連れ出して桑の木につり下げて殺した。その夜娘は馬がいなかったので父にたずねてこのことを知り、驚き悲しんで桑の木の下に行き、死んだ馬の首にすがつて泣いていたのを、父はまたこれを悪んで斧を以て馬の首を切り落したところ、たちまち娘はその首に乗つたまま天に昇つて去つた。すなわち馬をつり下げた桑の枝でその神の像をつくる。さて、ここにはいくつかのことが明瞭に看取できる。独り身の農夫とそれに似合わぬ美しい娘、飼われている馬、娘と馬の異類婚、馬の殺害、娘を乗せて馬の首が天に飛び去ること。このとき馬の殺害がおこなわれた刑場と刑具がたまたま桑の枝であつて、それによつて神像がかたどられたのだが、それは馬でも娘でもない、蚕を祀るものであり、しかも蚕の神とは言つてもそういわれない限りは単に何重にも着せられた色鮮やかな着ぐるみに過ぎない。このときたとい桑の枝で蚕の神が象られているにしても、娘と馬の結婚や馬の殺害、天の彼方に娘と馬の首が飛び去ることにどんな連絡がつけられるというのか。管狐はけつして見ることが明瞭である分、却つてどんな推論も当てはまらない。ちなみに、ヤムタラの北方では何百年も前に絶滅してしまつた文化がある。すなわち音楽である。謡に近いが、それよりもはるかに複雑な分節を有している。馬と人間の女の結婚から始まる理解しがたい物語も、あるいはこの辺までゆけば解ける糸口が仄見えるのかもしれない。

眷属揃つて空しくなること

祭礼の日にはそれぞれの地方から一斉に人々の蟬集があつた。各地の舞、手品、曲芸、それにお馴染みの偶人劇などが繰り広げられた。雲を衝くようなサンダルを履き、きらめくつるぎで万朶の花吹雪を散らす。永い一日は、胸ときめきはらはらとさせる危うさのいっぽうで、いつまでも終わらない退

屈で黄金の時のきらめきを思わせるのだ。なかでもヒエの祭礼は祭の中でもとりわけて華やかで、賑わいの中心ともいうべきものである。諸国から集まるクグツたちが持ち寄るのは、秘密の呪言ではなくてその限りなく外郭をなす荒唐な物語である。もとより近郷近在の唱道の達者たちは、シノミヤミヨウジンに定められた日に蝸集するのを習わしとした。ゴウシュウセキノシミズ近辺のあたりのことである。そこで語られる祭文めいた歌唱・詞章は、ときにきれぎれに点綴し、ときに大きくまとめられて綾をなし、若干の混乱と錯綜をもって現在に残された形をとっている。ヒエの由来譚は次のような物語である。キヨヒラというもの、その北の方とともにハツセノカンノンに願掛けして得た子がアイゴノワカである。ただし彼には呪いが掛けられていて十四の年に死ななければならぬ。またワカ十三歳の折に、ハツセカンノンと、ヤマフノミサキの綱を切って遭わされたので、ワカは母北の方を失うことになった。キヨヒラはその後添いにクモイノマエを娶ることになったが、ワカが持仏堂に籠もり手飼いの猿のテジロを相手に慰んでいるのを見て、自分の子とも知らず、恋してしまう。侍女のツキサヨを語らって一日に七度もケソウブミを送るが、ワカは隠れてしまう。二人の女は却ってこれを恨み、重宝の鞍・鎧を盗み出してワカを陥れる。すなわち怒ったキヨヒラはワカを高手の小手に縛って櫻の木に吊り上げておく。テジロの猿も戒めをほどこうとすることがかなわない。そこへ地獄の閻魔庁ではワカの実の母が魑の姿を借りて、彼が危難を救うとて、閻魔庁の場に申し出る。すなわち魑の身で綱をかみ切り、テジロの猿が抱き取って、ワカはその場を脱出する。暗く雨降る夜、火が見えるので寄って行くと、細工のセンミンの家である。ワカはここで最高の礼をもつて遇される。ここから神の前にアラコモをしく風が出来たという。夜が明けてエイザンにのぼるが、ワカの懲憑に反し、高札に従って細工の民はここより引き返す。独りでエイザンを訪れたワカは、叔父のアジャリから見えて天狗のたぐいと思われて、皆にさんざん打擲される。そこを逃れて山を下りようとした三日目、ワカが疲れて休んでいると、アハヅノシャウのタハタノスケ兄弟が来合わせた。ワカに、柏の葉に栗の飯を分けて与えた。そこから「志は木の葉に包め」というようになった。またそのあと、アナフノサトの予言とて、麻は蒔くとも芋になるな、花は咲けども桃ならず、という呪い

が土地と土地の婆とに掛けられた。そしてとうとうワカは、キリウが滝に身を投げることになった。そのときアイゴノワカおん年十五歳。約束よりも一年ばかり余分に生きたことになる。クモイノマエは簀巻きにして川に沈め、ツキサヨは引き回しの末イナセガフチに投げ込んだ。かの滝に来てみると、十六丈の大蛇がワカの骸を背に乗せて現れた。キヨヒラが最初に淵に入ると、アジャリも弟子どもも、アナフの婆も後悔して身を投げる。タハタノスケ兄弟もテジロの猿も、すべて空しくなってしまう。細工の夫婦はカラサキの松をアイゴの形見としてそこから湖水に入った。そのとき死んだもの上下百八人と伝える。すなわちサンノウゴンゲンのいわれである。

夜中

夜中、肩が凝って眠れないので、服を着て外に出た。

霜が降りて、水たまりが凍ったばかりなので、寒いだろうと思ったがそうでもない。もやがかかっている、季節がほんの少しだけ夏の方へと戻りしてみたいだ。

目の前の林を眺めながら、取りあえず立ちションをする。満天の星空を見上げたり、夕日を眺めたりしながら立ちションをするのは、この地でのわたしのささやかな至福のひとつきだ。

林の中はひっそりしている。ついこのあいだまで、夜通し鳴いている鳥や虫たちの声で、昼のように賑やかだったのに。もやの中に浮かんでいる春楡の梢と幹の輪郭だけが、生き物たちの名残りを漂わせているようだ。

夜中に目が覚めることはよくある。何度目も目が覚めて何度もトイレに行くのは、年齢相応の現象らしいが、肩こりがひどくて目が覚めるのは、原因がどこにあるのかよく分からない。そのまま横になっていると呼吸が苦しいので、とにかく布団を抜け出すことにしている。医者の説明によると、肩の腱鎖関節が外れているせいで肩こりや頭痛が起こりやすいのだそうだが、回避する方法が見つけれられないので、そうなったときにはそれなりの夜を過ごすしかない。風呂に入ったり、パソコンで麻雀ゲームなどをしながら、息苦しさは去ってくれるのを待つ。柔軟体操などは、なぜかこわばりを助長するようだ。頭を使うのもよくない。ひたすらだらだらする方が、今のところ効果がある。一時間か二時間そんなふうに通じていると、自然に眠りに戻れそうな感じになってくる。そのタイミグを狙って布団にもぐり込むと、すぐに眠りに落ちて、今度は朝遅い時間まで目が覚めない。わたしはときどき、そんな夜中の過ごし方

を余儀なくされているけれども、夜中に起き出してひたすらだらだらする時間の過ごし方は、できない人にはできないかも知れない。布団の中で悶々とするように、起きてからも悶々としてしまうのではないだろうか。

口を開けてぼんやりしていても平気な人、自意識を放棄できる人、仕事をしていなくても朝起きる必要がない人などが、夜中の眠れない時間に条件として対応しやすいかも知れない。わたしは四十代の後半から六十を過ぎた現在まで全体の勉強会に顔を出しているので、門前の小僧みたいなものだけれども、ぼんやりしていても平気が自然と身に付いてしまっただろう。

人には人それぞれの夜中がある。そして、わたしの夜中も含めて誰の夜中も、とくに興味深いものとは思えない。なにもできない時間を持てあましている他人の夜中を、夜通し眺めることができたとしても、おそらく退屈なだけだろう。

眠れなくて外に出て、もやと闇に包まれた林を眺めながら、ぼんやり佇んでいる。林がなければ、ただ、闇ともやの中に佇むことになる。分譲会社の老いた社長が立ち寄ってくれたときに、「この林は残してもらえますよね」となにげなくお願いしたら、「わたしが死んでからどうなるか、木村さん、そこまでは責任がもてません」と言われた。それはそうだろう。

ついさっきまで息苦しさがわたしの最重要課題だったのに、今は呼吸などしていないみたいに楽になっている。目に見えないけれども、空気がきれいなんだと思う。なによりも単純に気がいい。深く息が吸える。もやのなかにわたしが溶け出していきながら、わたしの輪郭も鮮明になっていくようだ。

すっかり葉が落ちた春楡の、高く伸びてい

る梢ももやに包まれていて、その背後がうすぼんやりと明るい。こちら辺に街灯はないので、林の向こうのどこかの家の灯りが反映しているのだろう。それとも、空じたいが明るいのだろうか。

何かもの思いにふけっているわけではない。湿った澄明な空気が、体に染みていくのをひたすら感じている。どこかに鹿や狐がひそんでいるはずだけれども、夜中の闇に対する不安はない。今のわたしには、不安の芽そのものがないようだ。孤独とも思っていないし、気持も弱っていない。

とくに意地をはって生きているわけではないと思うけれども、なにかに慰められるのはもともと好きじゃない。癒されたりなんかするのは、もっと苦手だ。でも、こんな夜中に静かなもやに包まれて、妙に素直な気分になつているのは、わたしだけの力ではできないことかも知れない。

ため息をつくその瞬間だけ不安を忘れて、ほっとすることができるといふことを発見した四十代のころ、わたしはおそらく孤独と不安のなかにいた。なぜか、いつか抜けられると信じていた孤独だったけれども、抜けられないままになる可能性もあった。あのとき崖の縁にいた、と思いつくことのできる鮮明な幾つかの光景がある。

高速道路を走っていて、あのコンクリートの壁に突っ込んだら楽になれるだろうなあ、と思つたことがあつた。何年ものあいだ、毎日のように頭痛に苦しめられていた時期だった。ハンドルを切ろうとする力と抑えようとする力を拮抗させることを繰り返しながら、なんとかパーキングまで辿りつき、真夏の数時間、シートに横たわって痛みをやり過ごそうとした。コンクリートの側壁があんなに磁力を持つて見えたことはなかった。

崖の縁はどこにでもある。誰でもその縁を歩いているのに、そのことに気づかないだけかも知れないのだ。偶然、足を滑らせる人もいるだろうし、はつきりと磁力に引き寄せられる人たちがいることも確かだろう。

孤独や不安からいつのまにか、ひとりで立ち直つたのではなく、もうひとりのわたしがいて、そのわたしが回復したか、そのわたしがわたしを回復させたかのように思えるときがある。

もしもわたしがひとりしかいなかったら、笑つて誤魔化すことも、打ちのめされて横たわることも、ささくれた心を抱えつつづけることも難しいのではないだろうか。

ふたりのわたしが、重なつたり離れたりしながら同じ人生を、違う人生のように生きることが出来る。わたしの人生に、もうひとりのわたしの人生を紛れ込ませることが出来る。そんなふうを意識していたわけではないけれども、そんなふうにして、崖の縁の逃げ道を踏みしめてきたのではなかったか。

くずおれたときに、すぐに体勢を立て直すことは難しい。それに、くずおれたままできているそんなわたしを、もうひとりのわたしが、くずおれないまま見つめていることができるとしたら、なんとなく心強いのではないだろうか。

やはり体調を崩していたときに、自分がふたつに分離して、どうしてもひとつに重なつてくれないと感じていた時期があつた。あのとき、わたしともうひとりのわたしは、両方とも頼れない感じだった。わたしが困っているのに、あつちがちつとも助けてくれない。わたしは地面に視線を落とし、もうひとりのわたしはそっぽを向いて空を眺めている。

そんなこともあるから、もうひとりのわたしをあてにしてはいけないうちかも知れない。わたしが困っているときは、もうひとりのわたしも困っていることがある。しかし、たとえそうであっても、やっぱりわたしひとりでは辛いと思う。

夜中、眠れなくて、ぼんやり林を眺めている孤独でないわたしは、もうひとりのわたしとひとつに重なっているのかも知れない。

confidence

明日図書館に本を返しに行く。一七日間延滞しているから、一七点罰則点をつけられる。子供も大人も、生徒も先生も関係なく、誰にも平等に罰則点はつくのである。

(後藤)

11月中旬には東京に戻る予定。下の娘にも赤ん坊が生まれて、ふたりの孫のおじいちゃんになった。東京では孫育てにかり出されそうなので、早々にまた熊牛に戻って温泉に浸かりながらのんびり家作りをした方が、長生きできるかも知れない。(木村)

年寄りの介護報告のようになりつつあるこの後書。こんなんでええんだろうか。生老病死の老病ばかり。生き生きと生きようっと。(福島)

さて、(承前)です。44歳の夢、「PCオーディオってなに？」2ヶ月間、このことについて、様々に考え抜きましたが、完全に道に迷ってしまいました。「PCオーディオ」云々以前に、「オーディオ」ってなに？という大問題が、私の前に立ちはだかつたのです。たしかにこの20年間、Classic音楽を人並みに聴き続けて来ましたが、CDの再生装置は、いつもパソコンでした。ですから今、改まって「オーディオってなに？」と問うことは、44歳の(これまで一度も詩など書いたことがない)何方かが、私に向かつて「詩ってなに？」と問うことに等しい、と言う結論に、至ったのです。私は、20年間詩を書いてきました。そのため、この20年という時間のなかで得た知識・テクニクは、これから詩というものを書いてみたい、というピュアな方を、質・量ともに遥かに凌駕する、はずです。また、これは、たいへん傲慢な言い方も

知れませんが、44歳の何方かは、おそらく詩について知る前に、生命が終りを迎えてしまうのではないでしょうか。もちろん、私も、オーディオについて知る前に、生命が終わりを迎えてしまうことを、覚悟の上の発言です(いや、オーディオなら、最先端の位置にいて、5年くらい時間をかければ、最低限のことは何とか押さえられるのではないかな、等とも思ったりします)。44歳になって、全くの零から、さあ詩を書き始めよう、と仰る方は、おそらく詩というものを、何も書くことが出来ないだろう、と言う結論に、私は思い至ったのでした。

(野村)

自分は百パーセント感覚人間であるという変な自負がある。それは幾分誇張した言い方に過ぎないのだが、それゆえ、自分にとって「理論など、所詮、自分の感覚の正当化の手段に過ぎない」という思いがある。その当然の帰結として、人類の知的遺産と言われるものから、もっと低次元の他愛のないものも含めて、他者の唱える理論は、全て自分の感覚によってしかその正当性を判断することが出来ない。批評にしても同じで、自分は基本的に、批評自体の純粋な正当性などというものを信じていない。批評には、しばしばその背景に、発信者にとっての利益誘導、利益保護、あるいは権力争いといった不純要素が含まれているからだ。もちろん、批評の刀の切れ味を試すためだけに行われる辻斬りのような批評など、論外と言っている。自分にとって正当な批評とは、純粋な探求心と無償性に裏付けられ、淀川長治さんの対象物に対する愛情をもってなされるものだけだ。(秋川)

11月が来る。私は詩でも書いたが井伏鱒二を読んでいる。記述の綿密さ、立体性に驚く。彼自身がまるで被ばくした経験があるようだと思っていたら、調べてみるとどうも『黒い雨』は実在の重松静馬という人の被ばく時を記した日記に多くを負っているようである。文学作品のオリジナルとは何かも含めどうもかなり根深い問題のようでもまた調べる必要があるかもしれない。

(石川)

最近、ネットラジオNPRを知り、これに熱中している。まずプログラムがすごすぎる(こういう言葉はきらいだが、ここで使うしかない)。いいですか、まずPiano Jazzという番組。これは伝説的(ぼく自身そう思っているだけ)なピアニスト(祈る、彼女がまだ生きてくれているのを、なぜなら彼女の番組なのに最近はこの人が司会していることもあるから) Marian McPartlandが毎回素敵なゲストを、例えばハーモニカのTootsなどを迎えて、ジャズ界の御両所二人のトークあり即興演奏あり、もちろんスタンダードの演奏を含めて、という垂涎ものの番組なのです。若く有能なギタリスト、Julian Lageなども出ている。クラシック好きの龍君などには、ここのその系列の番組を紹介したい。最近ではThe Budapest Festival Orchestra At Carnegie Hallなどというコンサートがあり、それを只で聴けるのですよ。ほとんど一時間近く。もしかして龍君も含めてご存知だったら、ごめんなさい。日本のラジオやテレビと比較したくないが、ほんとうに日本に住んで生きていることは、一体どういふことなのか、と考えざるをえなくなる。新聞も読みたくない、テレビも見たくない、という人に心からおすすめします。(水島)

(<http://www.npr.org/programs/piano-jazz/>)

毎週ドイツ語の詩を日本語に翻訳して、わたしの詩のブログ「詩文案」となにもぬねの？に上梓しているのだが、それももう45週の詩が終わり、次は46週目の詩である。ついこの間韓国の詩人、キムの「空の手」という詩を訳したばかりだというのに。一年の経つのは誠に迅速なり。来年のカレンダーをドイツの友人が送ってくれたので、これは年末年始の楽しみにとっておこうと思う。読者諸賢もお楽しみいただければと思います。こっそりと覗いてみたら日本からは俵万智さんが入っていました。(岩田)

三月以来、小出裕章『隠される原子力・核の真実』、同『放射能汚染の現実を超えて』、同『原発のウソ』、同『原発はいらない』、小出裕章・矢ヶ崎克馬『3・11原発事故を語る』、矢ヶ崎克馬『隠された被曝』、高木仁三郎『市民科学者として生きる』、『原子力神話からの解放』、広河隆一『暴走する原発』、同『福島 原発と人びと』、肥田舜太郎・鎌仲ひとみ『内部被曝の脅威』、鎌田慧『原発列島を行く』、吉岡齊『原発と日本の未来』、七沢潔『原発事故を問う』、山本義隆『福島の原発事故をめぐる』、『アレクシエービッチ』、『チェルノブイリの祈り』を読み、原子力資料情報室『東電原発トラブル隠し』、井野博満・後藤政志・瀬川嘉之『福島原発事故はなぜ起きたか』、武谷三男編『原子力』、菅谷昭『新版チェルノブイリ診療記』、NHK『東海村臨界事故』取材班『朽ちていった命』、新潟日報社特別取材班『原発と地震』、飯田哲也監修『原発がなくても電力は足りるー』を途中まで読んだ。それ以外の本はあまり読んでいない(翻訳仕事で読んだものを除く)。このなかで詩人諸氏にはアレクシエービッチ『チェルノブイリの祈り』(岩波現代文庫)がお勧めです。(長尾)

いかと思ったりもした。(倉田)

紅葉のピーク、草津へ行った。湯畑のぐ
るりに『エリマキツネザルにさらわれま
す!』という捨て看板が幾つも風にはため
いていた。濛々たる湯気の中、彼等の郷に
連れ去られた名前の無い余生のことを思っ
て陶然となった。でもよく見れば『エリマ
キツネザルにさらわれます!』(草津熱帯
園)だった。

Bachianas Brasileiras No. 4-2 Coral
Canto Do Sertao は、エイトール・ヴィラロ
ボス作曲ブラジル風バツハ第4の2曲
コラール『藪の歌』。(和田)

ここのところ、体が不自由なわりには、
秋におこなわれるさまざまな展覧会や音楽
のセッションなどによく出かけている。大
きいものとしては、計二日をかけて横浜ト
リエンナーレに行ったり、赤レンガ倉庫で
おこなわれたマルタのステージにも行った。
横浜トリエンナーレでは、実験的な試みは
概して新鮮であったが、それは手触りのあ
る具体的なフォルムや形象がそうなので
あって、たとえばさかんに出品されていた
数多くの映像作品はこの限りではない。映
像作品が「作品」たりえているか、それと
も一種のコンテンツにすぎないのか、まだ
成熟が俟たれるところだろう。私としては、
単なる再生機械の枠を超えたところに希望
も予感も持ちたいところだ。チケットが無
料というのも、私と介添えの妻にはありが
たい。代わってマルタのステージは嬉しい
ものだった。そのあくの強さのゆえに、毀
誉褒貶かまびすしくはあるが、フュージョ
ンからついにはジャズの信仰告白に至る甘
いひびきに、しょうじき全細胞がひらく経
験をした。ステージが終わったあとも、夜
の赤レンガ倉庫広場前、海の夜景の拡がる
あたりをふらふらと歩き、自分が生きるこ
とにもう少し自由になってもいいのではな